

2003年秋 アレクシエーヴィチさん来日決定!!

親愛なる竹内高明様

2003年10月に予定された、日本の諸都市での講演旅行について、日本からのお手紙をいただきました。

ご招待ありがとうございます。

私の本が、日本でも読まれていることがわかり、うれしく思います。日本へは、もちろん喜んで行かせていただきます。

日本を旅し、人々と話すことに興味があるのです。

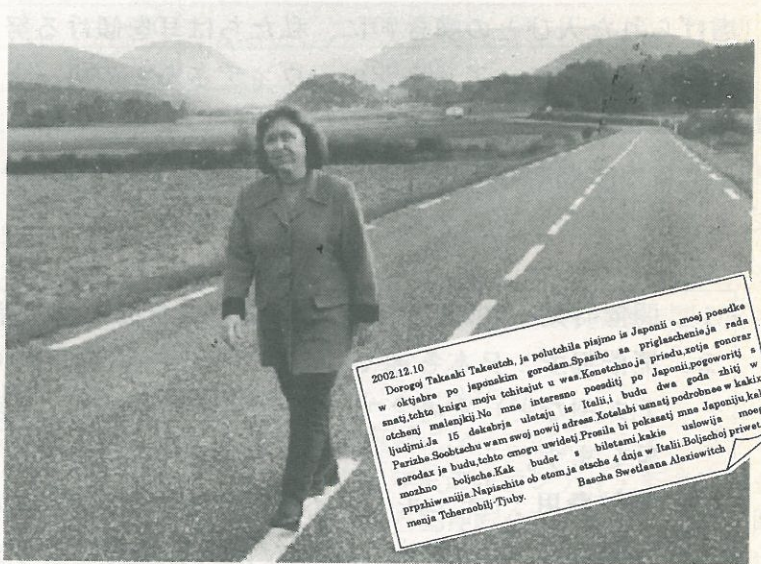
私は(2002年)12月15日にイタリアを発ち、パリに2年間

○む予定です。新しい住所はまだお知らせします。日本でどんな町に行くのか、何を見ることができるのか、とても楽しみにしています。できるだけ多く日本を見せていただければありがたいです。

日本の皆様どうぞよろしくお伝えください。

2002年12月10日

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ



2002.12.10
Dorogoj Takasaki Takautsch, ja polotabila pisjimo is Japonii o moej poslednej w oktjabre po japonskim gorodam Spasibo za prigaschenie ja rada smatj, tohto knigu moju tchitajut o was Konstchno ja priedu, xotja gonorar otcheny malenkiy. No mne interesno possiditj po Japonii, pogoworitj s ljudmi. Ja 15 dekabrja uletaju is Italiij, budu dwa goda zhitj w Parizhe. Soobstschu wam swoju nowuju adresu. Xotela bi pokazatj mne Japoniju, kak gwodax je budu, tohto cmoju uwiditj. Promila bi pokazatj mne Japoniju, kak možno bolsche. Kak budet s biletami kakie uslowija moego prpshiwanija. Napishite ob etom ja stashe 4 dnja w Itali. Bolschoj priwet ot menja Tchernebilij Tjuty.
Bascha Swetlana Alexiewitch

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：大谷早苗

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

今秋開催決定!! スヴェトラナ・アレクシエーヴィチさん講演会 中部地区の主催団体を募集します!!

拝啓 寒冷の候、貴団体につきましては、ますますご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、このたび「チェルノブイリ救援・中部」は、「カタログハウス」「原子力資料情報室」とともに、念願の『スヴェトラナ・アレクシエーヴィチさんの日本縦断講演会』を実現するため、本格的に取り組みをスタートいたしました。

彼女は、国家（権力）に翻弄され犠牲にされた人びとの、悲しみと絶望を書き留めている旧ソ連出身の作家で、2000年に放映されましたNHK『ロシア小さき人々の記録』の反響も大きく、今の時代を語るにふさわしい人物です。

いま、再び地球上で最新鋭の戦闘機が火を噴こうとしているときに、彼女の目にうつる「虐げられた人びとの嘆き」に、私たちは耳を傾ける努力を怠ってはならないのです。

昨年からすでに、アレクシエーヴィチさんとのホットラインができ、彼女も日本での縦断講演会に強い意欲を見せてくださっています。素晴らしいイベントとなることは間違いないという予感がします。ただし、そのためには私達の方だけでは誠に不十分です。たくさんの方の市民団体と協力しあって、ぜひとも成功させましょう。

1. 開催時期：2003年10月上旬頃（彼女は2週間程度 日本に滞在）
2. 開催場所：日本各地で、のべ5～7カ所（東京・名古屋・長野・大阪・広島・北九州など）を考えていますが、基本的には立候補の声があがった地域間で調整します。
3. 開催費用：「チェルノブイリ救援・中部」が50万円を出資し、これを講演者と通訳（計2名）の渡航費及び国内移動費にあてます。各講演会については、各地の主催団体の負担、つまり独立採算制となります。
各地が負担する経費としては、「講演料・会場費・宿泊費・食費・地域内交通費」等（約30万円）が考えられますが、これらの経費を講演会の入場料で賄うこととなります。
4. 参加方法：参加を希望される団体は、参加費（1団体につき）10,000円を拠出して、主催団体となっていただきます。
（この参加費は、広告・宣伝費の一部となります。）

講演会および滞在期間を通じての通訳は、「チェルノブイリ救援・中部」のウクライナ駐在員：竹内高明が担当いたします。

以上を素案とさせていただき、主催団体が確定した後、正式なプロジェクトを発足したいと思っております。ご賢察の上、ぜひこの企画にご賛同いただき、ご協力いただけるよう重ねてお願い申し上げます。なお、勝手ながらご返事は2月末日迄にお願いいたします。

最後に、皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

敬具

2003年度の事業と予算の原案がまとまりました

(田中良明)

1月11日の運営委員会で、2003年度の事業と予算の原案がまとまりました。今後、現地との調整を経て、3月の理事会で正式に決定されます。以下にその概要を紹介します。

03年度には、新設された外務省 NGO 助成制度を利用して、ジトーミル州内にあるすべての移住者診療施設（診療所17・地域病院2）について、一応の初期治療が可能な程度に、医療機器・医薬品を整える事業に取り組みます。事業費は600～700万円。そのうち100万円は自己資金で、残りは NGO 助成制度による助成金を充てる予定です。ウクライナにおけるチェル救の活動は外務省からも高く評価されていますから、しっかりした申請書を書けば、助成金はもらえると考えています。

03年度のもうひとつの大きな事業は、アレクシエーヴィチさんの招聘です。主催団体の1つとして50万円を支出します。この事業の内容については別の記事で詳しく紹介されているので、ここでは触れません。従来支援してきた主な支援先別の予算は次のとおりです。

	2003年度	2002年度(補正後)	差異
州立小児病院	700,000	700,000	0
ブルシーロフ病院	700,000	700,000	0
ナロジチ病院	500,000	700,000	△200,000
市立小児病院・孤児院	1,350,000	2,500,000	△1,150,000
事故処理事業者協会	400,000	250,000	150,000
障害者協会	800,000	450,000	350,000

02年度の事故処理事業者協会と障害者協会については、チェル救関係者から現地へ直接寄付があり、それを含めた実質の支援額はそれぞれ50万円、90万円でしたから、03年度は実質的には減額です。市立小児病院と孤児院への支援の内容は、粉ミルクです。このほかに、各医療機関の医療機器メンテナンスの事業費85万円があります。

このように厳しい予算になったのは、収入の減少が見込まれているためです。

すでに確定している外務省 ODA 補助金が、02年度比で約40万円減になっていることと、ボランティア貯金交付金をゼロと見こんでいることが響いています。(02年度のボランティア貯金交付金は、約170万円ありました。) ボランティア貯金交付金は、原資となる郵便貯金利子からの寄付が貯金利率の低下によって減少してしまい、チェル救のように長期間配分を受けている事業については、打ち切られる可能性がきわめて強くなっています。これまでとは別の事業による申請をして、交付金獲得の努力はしますが、予算上はゼロとせざるをえませんでした。全体としては、次のような予算になっています。

<2003年度 予算総括表>

	2003年度	2002年度(補正後)	差異
収入合計	13,140,000	15,344,000	△2,204,000
支出合計	15,150,000	16,355,000	△1,205,000
海外事業費	10,090,000	11,100,000	△1,010,000
国内事業費	1,700,000	1,200,000	500,000
管理費	3,360,000	3,355,000	5,000
予備費	0	700,000	△700,000
当期収支差額	△2,010,000	△1,011,000	△999,000

200万円の支出超過(赤字)です。この予算どおり事業を執行しますと、03年度末の繰越額は、1,100万円余りになる予定です。

ウクライナ講座「ウクライナ料理教室」

みんなで作って、おいしく食べて

冷たい雨の降る12月21日(土)、あまりの悪天候に参加者が危ぶまれましたが、次々に人が集まりだし、胸をなでおろしました。ちょうど同じ日に“ミルクキャンペーン”の街頭呼びかけに参加してくれた高校生たちも途中で合流し、総勢35名でした。

今回の講師は、前々回のウクライナ講座でおなじみのオレーナ・シガルさん(京都市国際交流員)で、彼女の家庭の味のボルシチとワレニキ(ウクライナ風の水ギョウザ)、りんごケーキを教えてくださいました。ウクライナのボルシチは各家庭で作り方や味がいろいろあり、ブイヨンだけで作るスープはとてもヘルシーで好評でした。

「ウクライナ料理ってどんなかなと思って…」とか「東欧に行っていたので…」という参加者にも、「ウクライナ料理」をきっかけとして、ウクライナやチェルノブイリ救援活動に興味・関心を持ってもらえました。

また、ミルクキャンペーンの街頭アピールで凍えた女子高生たちは、「寒かった」「チラシをなかなか受け取ってもらえず、悲しかった」「これからもボランティア活動に参加したい」「ウクライナ料理はおいしかった」などと感想を述べながら、ウクライナ講座参加者と交流のひとつときを持ちました。(京)



2003年度ウクライナ講座へのおさそい

第1回「読書会／『アフガン帰還兵の証言—封印された真実—』」

ウクライナ講座も、はや4年目となり、すっかりお馴染みとなりました。そこで今秋、ルポルタージュ作家アレクシエーヴィチ氏をお迎えすることとなったチェルQは、彼女の著書にひとりでも多くの方に触れていただきたいと思います。読書会を催すこととなりました。第1回目は『アフガン帰還兵の証言—封印された真実—(日本経済新聞社)』です。

その一節より…『誰もが生き延びることに夢中だった。18歳から20歳の若者ばかりだ。他人の死には慣れてしまったが、自分の死は怖かった。』

報われない戦いに駆り出され、命からがら帰還しても祖国に封印された若き兵士達の凄惨な体験を、丹念にひろい集めた体験集です。

進行役はチェルQ運営委員の橋本京子さんです。91年の湾岸戦争以来、世界は、パレスチナ・イスラエル問題、アメリカの「9.11」事件と世界各地のテロ、アフガン戦とつづき、今や「対イラク戦」が避けられるかどうか、まったく予断を許しません。この時代に生きる私達は“戦争”をどうとらえ、未来をどう見つめるのか、くり返された戦争から何を学ぶのか、この「アフガン帰還兵」の体験をどう受けとめたか…など、語り合ってみませんか。ぜひご参加ください。

日時:2月15日(土)午後1時30分~4時

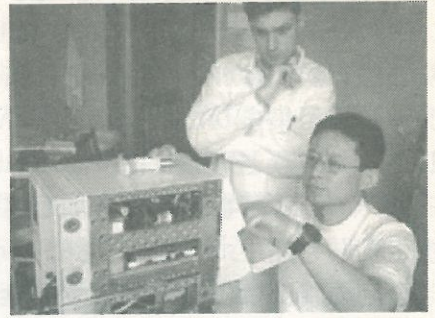
場所:名古屋YWCA(地下鉄東山線 栄駅下車徒歩5分)

ウクライナ訪問団・第4回医療支援活動

2003. 2. 11~2003. 2. 20

臨床工学技士 北野 達也

年々、外務省・郵政事業庁の補助金や交付金の配分状況が厳しくなり、限られた財源の中でいかに継続支援を行なうかが今後の課題となっている。そんな中、2000年より21世紀の「医療技術専門家派遣



プロジェクト」で、臨床工学技士（厚生労働省国家資格）として継続渡航し、昨年から自立支援を目的に、一人の青年を高度医療専門職に位置づけるべく「**人材育成プロジェクト**」を行なっている。彼の名は、**アンドレイ・ポスタヴェンスキー氏(右上写真)**（ジトーミル州立小児病院の准医師<ジトーミル技術工科大学医療機器操作技術科在学>）で向学心旺盛な青年であり、熱い眼差しは、若かりし頃の自分と重なって見える。前回の渡航から一年…。彼は州立小児病院において「なくてはならない存在となっている」と聞いている。今回の技術指導でさらに知識を深め、スキルアップして欲しい。

<第4回渡航目的>

- ① 現地で臨床工学技士 (Clinical Engineering Technologist) 等の専門職養成。
- ② 寄贈医療機器、昨年船送中古医療機器の稼働状況、所在確認、点検・消耗部品交換等。
- ③ 院内講義「医用安全管理学」、「呼吸療法全般（気管支喘息重積発作対処法等の実技を含む）」その他、医療技術移転。
- ④ 現地で高度医療専門職を育成し、就職先を確保するため、ジトーミル技術工科大学医療機器操作技術科（5年制）における講座（座学・実技）開設ならびに実習用中古医療機器の必要性有無について確認すべく視察。
⇒具体案提示。（現地の要望次第。）
- ⑤ 要修理機器調査、メンテナンス（点検・修理及び消耗部品交換）。
- ⑥ 診療材料、消耗品継続供給。
- ⑦ 各医療施設マネジメント提案。
- ⑧ 現地医療施設の問題、今後の課題検討。⇒次回への課題。
- ⑨ 昨年、船便で贈った「小児人工呼吸器3台・心電計2台」の操作説明および点検。

今回もアンドレイ・ポスタヴェンスキー氏に継続的な実地研修および医療技術移転を行なう予定であり、願わくば彼が在学するジトーミル技術工科大学医療機器操作技術科に自立支援のための人材を育成（高度医療専門職育成事業）すべく、「臨床工学専攻科（仮称）」等設置のための具体案を提示していきたい。

これらの人材育成事業は医療の質を高め、小児病院に入院する重症疾患の子ども達を救うだけでなく、その子ども達も、将来自国にて就職先を確保し、自立できるプロジェクトになるであろう。

今回、訪問団として同行の田中先生、山盛さん、榎本さんよろしくお願ひ致します。会員の皆様に、新たな活動報告ができるよう頑張ってきます。

2003年2月 ウクライナへ行ってきました！

★2月11日から20日の日程で、「新しい会社を立ち上げ張りきっている」臨床工学技士の北野さん、チェル救運営委員であり経済学者である田中さん、そしてチェル救のつよ〜い味方“救援物資管理責任者(?)”榎本さんとともに、ウクライナ訪問をすることになりました。



私が、前回訪問したのは「第2回スタディ・ツアー」を行なった1999年9月。久しぶりのウクライナ訪問です。が、何と言おうか、心はちょっと沈んでいます。今回の訪問が、私の苦手な厳寒の冬であるということも一因ですが、やってこなければならぬ仕事に原因があるのです。今回の仕事は、整理していえば「2003年度予算について」「今後の支援について」「外務省日本NGO支援無償資金協力(草の根支援)申請について」「奨学金制度について」などですが、その「」をひもとけば、現地カウンターパートとのハードなやりとりが頭に浮かび、ため息…。

しかし、じっくりと聞き、伝えるべきことはしっかり伝えてこなければなりません。また、このところ「健忘症」に見舞われがちで、事前準備がなにより必要なのですが、訪問までに間に合うかと心配しています。なんて情けない訪問団かとお思いでしょうが、正直なところです。どうか皆様、「しっかり仕事ができますように」と、祈ってください。

山盛三千枝

★私の前回の訪問は、2000年10月でした。そのあと腰を痛めて重い荷物が持てなくなり、しばらくはウクライナ行きが無理な状態でした。その間にウクライナからアントニウクさんやタビノヴァさんの健康について、気がかりな情報がいくつか入りました。現在は、お二人とも回復したようですが、ぜひ会ってみたいと思い、腰の状態もある程度回復したので、今回の訪問団に参加することにしました。個人的な思いを先に書きましたが、本務は現地諸団体との話し合いです。2003年度の予算について説明することと、長期的な活動のありかたについて議論することが主な



仕事です。キリチャンスキーさんの長広舌をかわして、少しでも実のある話し合いができればと思っています。以前、一度2月に行ったことがあり、その折は暖冬(日中の気温が0度程度)だったので助かりましたが、今回はどうでしょうか。

田中良明

★「届いたかな？ウクライナへ」調査団!!

たまたま、使われない部屋のあった我が家を倉庫とし、ウクライナへ送る荷物を預かり始めて2年。メインである医療機器はもちろん、100キロもある電動ベッド、一度も使われていない新古品の車椅子、ちょっと直せば乗れる自転車、知らない人が見たらリサイクルショップかと思うような品揃え。でも、すべて「かの地で役に立てば…」と多くの方々の厚意で集まったものばかり。それらは今、3ヵ月の船旅を経て何処でどうしているのやら。きれいに磨き上げたベッドは…、チェックの背もたれの車椅子は…、タイヤを替えて甦った自転車は…。「日本で使われなくなったものを使ってくれ」とはおこがましいのですが、みんなで役に立ってほしいという願いをこめて、掃除し修理した品々。きっと思いは届いて、救援に一役買ってくれている事でしょう。その利用者の声と笑顔に会えるよう、はるか8000キロ先まで確認の旅に行ってきます。



榎本恭子

「救援物資」を預かっています。 (知多市岡田：榎本美保子)

縁あって、チェルノブイリの仲間入りできたことを幸せに思っています。

「何故？」と問われれば、捜し求めていたものに出会えたから。チェルノブイリの事故を知り、関心を持ったけれど、実態はあまりわかりませんでした。今、ポーシェを読み被害にあった人達の様子、生活、精神状態をおいおいと知り、運営についても現地を訪れて、何が必要かを調べてきちんと支援する。当たり前なことなのに、その細やかな配慮が嬉しい。

薄い税金は、ばらまきだけの「脳」しかない人達より、限られた予算の中でいかに有効にお金を使い、苦しんでいる多くの被災者を救おうと努力する「能」ある人々にばらまき給え。又、事務局の方々が実に明るく、適材適所で、生き生きと、奉仕に励まれる姿から、私は気力を頂き、晩年の生き方を見つけました。表立っての仕事は体力がなくできませんがお役に立ちたいと思っています。

静岡県星美小学校のみなさんから あたにかりに支援をいただきました。 (大谷早苗)

“ちっちゃなハートにちょっぴりやさしさ

ちょっぴりちょっぴりあつまって…”

(創作オペレッタ「オズの魔法使い」のテーマ曲)

たくさんのお心遣いをいただきました。本当にありがとうございました。静岡県星美小学校では、6年生が中心になって「少しのガマン」で世界中の苦しんでいる子ども達に愛の手募金活動を取り組み、私たちチェルノブイリ救援・中部に車椅子2台が託されました。また「後援会のみなさん」と「愛の架け橋運動基金」からは、ミルク代をお預かりしました。

みなさんのやさしさが、チェルノブイリの子ども達の心をどんなに和ませてくれることでしょう。

ミルク代は早速現地に送金します。また、車椅子は三月の船便で現地に送る予定です。

チェルノブイリの子ども達の作文から…

チェルノブイリは私たちの歴史 (7年生：ハンナ・ジューバ)

チェルノブイリ！……それは黒いヨモギ(ブイリ)、つまり黒い現実、そして黒い痛み(ビーリ)でもあります。それは何千人もの人々の痛みです。

黒い不幸が、私たちの国で、1986年の花咲く春に起こったのです。

私は1989年に生まれました。チェルノブイリの不幸については、両親の話・TV・新聞の報道で知っています。この恐ろしい4月の出来事は、ウクライナの歴史の黒い汚点となりました。この出来事が、世界にウクライナという国の存在を知らせ、世界の広い舞台への登場が、美しさ、はなやかさ、豊かさでなく、悲しみ、苦しみ、涙を伴っていたのはとても残念なことです。すべての歴史と同じように、チェルノブイリの歴史にも英雄たちがいます。それはあの恐ろしい4月、原発を救い、プリピャチ、チェルノブイリ、キエフ、そしてすべての人類を救った人たちです。私の父もチェルノブイリ原発事故の事後処理作業にたずさわりました。父の話では、「ゾーン」で180日働いたそうです。父は、メダルに似た、事故処理作業員の記章を持っています。これはすでに我が家の歴史です。いろいろな家族の歴史から、彼らの住む国の歴史がかたちづくれます。歴史を作るのは人々だからです。チェルノブイリは、多くの家族に、肉親の病気と死をもたらしました。私たちの地区の公園にはチェルノブイリの犠牲者たちを追悼するオベリスクが建てられています。チェルノブイリ原発事故の日から16年が経ちました。毎年4月には、人々はオベリスクに花を捧げ、亡くなった人、チェルノブイリの英雄たちに敬意を表します。

ウクライナの歴史は、黒い太い線でチェルノブイリ以前、そして以後という2つの部分に分けられています。すべてのウクライナ人は、この大きな不幸から抜け出すために力を合わせなければなりません。

「奨学金事業」

99年に奨学金事業が始まってから4年になります。新規採用は7年間行うという計画ですから、ちょうど半分経ちました。この間に採用した奨学生は、教育大(20名)・医療専門学校(28名)・農業生態学アカデミー(11名)・医科大学(2名)の合計61名です(農業生態学アカデミーで退学による交代が1名あったので、実質は60名です)。このうち、昨年までに16名が卒業しました。すべて医療専門学校です。今年は、教育大の1期生(99年採用)5名と医療専門学校8名が卒業します。奨学生たちが本格的に巣立っていくようになってきました。今年は待望の医科大生を2名採用することもできました。

先ほど、「新規採用の計画は7年間」と書きましたが、最近計算したところでは、この計画の実現は確実で、さらにあと1年延長することも可能という結果が出ました。また、現地から支給対象校を増やして欲しいという要望も出ています。毎年の採用者数を増やすか、事業年数を延ばすか、これから考えていきます。

奨学金事業のために、これまで多くの方からご支援をいただきましたが、これからもよろしく願いいたします。(文責 田中良明)

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著 三浦みどり訳

『アフガン帰還兵の証言』

—封印された真実— (日本経済新聞社) の紹介



私は、恐怖映画とか残虐なアクション映画(これらはアメリカが専売特許だったが最近韓国、日本の映画にも多くなった)が嫌いです。道路に猫の轢死体があったら、ほとんどの人は一瞬目をそむけるでしょう。ところが、人間の内臓がえぐりとられたり、銃で蜂の巣のように殺されるシーンを平気で見る人可以います。なぜならそれらは現実ではないからです。

本書の原題は、直訳すると「亜鉛の少年たち」となります。1979年12月に旧ソ連軍がアフガニスタンに侵攻してから10年にわたり、旧ソ連各地から毎年10万人もの少年たち(旧ソ連の徴兵年齢は18歳)が「国際主義の義務を果たすための兵員」としてアフガニスタンに送り込まれました。その戦死者たちが、亜鉛張りの封印した棺に納められ、家族の元に送り返されてきたことから名づけられたものです。その戦争の悲惨さが、生きて帰ってきた帰還兵たちの証言によって、人間の想像力を超えるリアリティーで生々しく語られています。この赤裸々な真実は、アメリカの新たなるアフガン侵攻だけでなく、全世界で今も進行中の事態への予言ともいえます。(橋本京子)

2002 年後半は電力会社の事故隠しに始まり、政府の維持基準導入という開き直りに終わった。政府は今なお原発存続に汲々とし、原発受け入れに厳しくなる地方自治体に対して、際限のない補助金拡大で応じようとしている。財政再建をうたいながら、原発維持のためには税金を惜しげもなく投入する。傷だらけの原発運転を容認する維持基準導入で修理費は浮くかもしれないが、原発関連のトータルコストと大事故の危険性は、ますます膨らむだろう。これは末期症状である。加えて原発の行く手には東海地震がパッキリと口を開けて待っている。脱原発は今や待ったなしである。これまで原発推進だった自民党のエネルギー調査会会長、亀井善之助代議士は最近の著書で、「国策としての原発推進はもうやめるべきだ」と主張している。6月7日には、東京代々木公園で「原発やめよう全国集会」が予定されている。2003 年は脱原発の転換点である。

新エネルギーに向けた動き

政府や電力会社の原発への執着にもかかわらず、社会の底辺ではすでに脱原発への動きが加速している。例えば試行段階とはいえ、水素を燃料にした電気自動車（燃料電池車）が東京やロサンゼルスを走っている。家庭用燃料電池は日本で今年中にも販売が開始される。5年前には考えられなかったことである。これまでの原発や火力・水力発電所のような大規模発電所から長い送電線で電気を運んでくるシステムは時代遅れである。少なくとも家庭や病院・商業施設、オフィスビルなど中・小規模消費施設は、今後使う場所で発電する「小規模分散型電源」に移行するだろう。大規模電源が燃料の30~40%程度しかエネルギーを利用できず、あとは海に捨てているのに対し、小規模電源では廃熱を給湯、冷暖房に利用でき、エネルギー効率は70~80%に高まる。資源の有効利用からも優位である。また、これまで厄介ものの代表だった生ごみや畜産し尿などいわゆるバイオマスもメタン醗酵技術の進歩で利用可能になってきており、ガスタービンや燃料電池の燃料として、再生可能エネルギーの宝庫となりつつ

ある。北海道や滋賀県ではすでに家畜し尿による発電が始まった。昨年12月、農水省は「バイオマス・ニッポン総合戦略」を発表した。2010年までに全国500市町村で先進的なモデル事業を実施する予定である。風力発電や太陽電池などはすでに安定成長期に入りつつある。日本の太陽電池生産量は現在世界最大である。また、風力発電は今や全国の地方自治体で引っ張りだこである。

電力会社の未来

現在、中・大規模利用施設に限られている電力自由化は、10年後には一般家庭まで含めた完全自由化が見込まれている。誰でも自分の使う電気の発電施設を選べるようになれば必然的に割高な原発は淘汰される運命にある。工場の電力も自家発電が割安である。中部電力は2000年3月の電力自由化以降、岐阜県・三重県・愛知県・名古屋市など、県・市庁舎やジャスコなど民間施設への売電競争入札で、民間売電業者に全敗、13連敗を更新中である。いずれ電力会社は、送電線を賃貸し管理するだけの企業になるかもしれない。（河田）

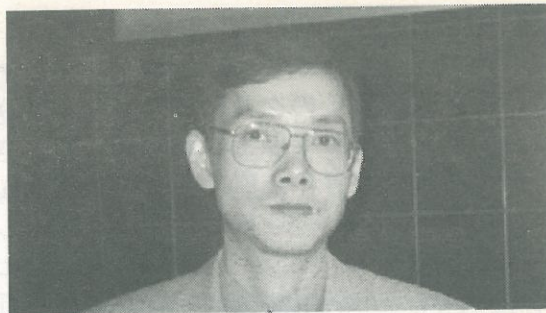
竹内さんのウクライナ便り

キエフ駐在 竹内高明

(今回は、外国人ヴィザ登録延長手続きの悪戦苦闘の物語です。)

12月26日、内閣付属人道支援委員会の入っている大きな建物(内閣自体や大蔵省等も入っている)に行き、事前に電話をしておいたにもかかわらず寒い玄関で15分以上待たされた結果、ヴィザ延長を申請する文書が出てきましたが、文面に欠落があり、訂正してもらうのにまた15分以上かかりました。これと移住基金から出してもらった申請書などを持って外国人ヴィザ登録局へ行くと、「ヴィザの無料延長を申請する」とあるのを見とがめられ(これは人道支援に関する法律に根拠となる記述があり、その条項も指示してあるのですが)、「この地区の税務委員会で承認の書類をもらって来い」と、零下10℃の外気よりも冷たく言われました。いずれにしても住所登録延長の方は料金(税金と登録局手数料で37グリヴナほど)を取られるので、それを払いに徒歩10分ほどのところにある公共料金支払い銀行(ソ連時代からあるもの)に行く(登録局自体では、なぜか健康保険強制加入だけを行っており、これは1年500グリヴナ)と行列ができており、支払いが終わるとすでにヴィザ登録局の受付時間は終わっていました。こういうことはこちらで役所がらみの用事があれば必ず経験することなので、驚きはしません。ただ後まで長く残る不快な思いをさせられるだけです。明日もう一度交渉に行ってみますが。

12月27日、再度外国人ヴィザ登録局へ行き、担当者と話すと、「無料延長が希望なら局長と話してもらうしかない。局長の面会日は毎週水曜」と言われ、次の水曜は1月1日なので、その次は8日。私のヴィザは7日で切れる、と言うと、「8日朝来れば問題ない」との返事。このやりとりをキリ氏に伝えると、「局長の名前と電話番号を聞いて来い。ジトーミルの登録局の局長に話して、キエフの局長に電話させる」と言うので、「とにかく年明けにもう一度交渉する」と答



えました。

1月2日。また登録局へ行き、担当者と話してわかったのは、私が住所登録延長料と思って支払っていた37グリヴナほどの中に実はヴィザ延長料も含まれていたということです。そのうちの税金分は登録局の管轄ではないので、登録局だけの裁量で無料にはできない...というのでした。どうして最初からこのようにわかりやすく説明してくれないのか、が、この国の官僚主義の巨大な謎です。とにかく、必要書類とパスポートを提出し、4日16時に受領に来いということで、受領票兼臨時身分証明をもらいました。

1月4日。朝10時前にキリ氏から電話があり、「昨日ジトーミルの局長に電話が通じなかった。今話したところ、すでに11時にキエフの局長が竹内に会うことになっているそうだ」と言われて混乱しましたが、とにかく出かける支度をしていると、続いてジトーミルの局長から電話があり、同じ話をされた後、「(キエフの)登録局への支援の話もあなたの団体とするように。よろしいですか?」と念を押され、私が絶句していると電話は切れました。キエフの登録局に11時ちょうどに駆けつけ、局長室へ行く廊下で誰何している警備員に、「11時に面会の約束がある者だ」と言うと、「局長は出かけた。いつ帰るかは知らない」との返事。いつ帰るかわからない人を待っているよりは、4時に直したほうが、と思い、4時にもう一度来ると、20分以上待たされたあげく、パスポートが戻って来ました。【これで一件落着とならないのが、ウクライナのすごいところ。後半は、次号に続きます。悪しからず。(編集子)】

事務局だより

昨年のことになります、ポレーシェの発刊が遅れ、呼びかけが遅かったにもかかわらず、大変多くのクリスマスカードを送っていただき、またミルクキャンペーン一般のキャンパも昨年以上にお寄せいただき、本当に有り難うございました。

昨今の学校教育の一環で学校の生徒さんや先生からの問い合わせもちょくちょくあり、それをきっかけにカード作りに参加していただいた方、研修生が飛び込み『営業』したことがきっかけで参加された方、そして毎年の恒例行事としてご参加いただいた方。さらに今年は市邨学園ボランティア部の生徒さん達の協力で街頭募金が実現。本当にいろいろな方がそれぞれのやり方でそれぞれの思いを寄せていただいた結果のクリスマスカード1800余通・ミルク代への寄付200万円余り(今年度合計)だと思います。つくづく、「チェルQってこういうたくさんの方々の『思い』に支えられているんだなあ」と思わされました。

またそのような中、クリスマスカードを書くことで「自分が癒された」とおっしゃる方が何人もみえ、なにか新しい活動の方向性が見えてくる気がしました。

年が明けて若者が一人二人とインドへ研修に旅立ち、事務所はもとの3人に。正直寂しくなったなあ、なんて思ってる後ろで山盛さんはウクライナ訪問の準備に、河田さんは名簿の管理に忙しそう…。さて私も伝票書がなくっちゃ！ (佐保)

ミルクキャンペーンにご協力ありがとうございました!! <カンパひとこと>

☆安全なミルクを飲んで赤ちゃんが大きく育ちますように。

(長野市 Y・Cさん)

☆ポレーシェをありがとうございます。人災により終わりのない苦しみと悲しみの中で生きる人々のこと、この悲劇に学びもしない無責任な原発推進国日本のこと、やりきれない思いで拝読し、貴いご活動に感謝致しております。

(愛知県豊明市 K・Tさん)

☆古本市での売上金を寄付します。

(長野県大町市大町北高校図書委員会)

編集後記

- ◎ 最近、隣の住人の料理の腕が上がったのか、私が超空腹で帰宅すると、すっごくいい匂いがベランダ越しに漂ってくる。心の中で「ついでに私の分も～」と絶叫！(佳)
- ◎ 毎年1月の編集作業は、耐寒我慢大会。今日はそれに加えて、睡魔と空腹に耐えています。わあ～お！作業能力が低下したの!?「明日」が「今日」になってしまった!?(美)
- ◎ 3月19～21日、京都・滋賀・大阪で第3回「世界水フォーラム」が行われる。琵琶湖の水で顔を洗って育った私、ボランティア参加で、改めて『水と私たちの生活』を考える。(京)
- ◎ 阪神大震災から丸8年。東海地震も近い。原発は本当に大丈夫?1974年、米国で原発の耐震設計基準(ASMEコード)が大改定され、日本でも基準書の厚味が3倍になった。だから安全だって!?じゃあ、改定前に作られた原発はどうなっちゃうの?(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473